



# Via Latina 22

2023年12月 326号

## 総本部よりのお知らせーマリア会

USA管区での司祭叙階式	1
2024年5月、インド地区が創設されます	2
Via Latina 22 でのマリアニスト家族世界評議会の会議	3
総会に向けての準備の継続	4
スイス、フリブールのヨーロッパマリア会員の会議	4
マリアニスト家族のため朝の養成プログラム	5
殉教者と迫害を受けた人たち	6
Pironio枢機卿の列福を公布	8
待降節のための祈り	10

## USA管区での司祭叙階式

José Luis González Molina士が、2023年11月18日メキシコ、ケレタロ、プエブリトのサン・フランシスコ・ガリレオ小教区でのミサ聖祭の間に司祭に叙階されました。

家族、友人、そしてマリアニスト共同体のメンバーが司祭叙階式のミサに参列しました。そこにはUSAマリア会管区を代表してOscar Vasquez管区長、Tim Kenney霊生部長が列席し、そしてヌエストラ・セニョーラ・デ・グアダルーペ共同体付き司祭Quentin Hakenewerthと、また同僚Larry McBride士、Francisco González士、Frank Paco Gomes士、そしてEd Longbottom士が列席していました。

ミサ祭儀の終わりにJosé Luis師は集まった人たちに次のように感謝を表明しました：“私は命の賜物を神に感謝し、信仰の賜物を両親に感謝し、私を受け入れ、私が成長するのを助けてくださったマリア会員の兄弟たちに感謝し、そしてこの年月の間、愛情とサポートを私にくださったマリアニスト家族に感謝します”。彼はまた、マリアニスト司祭であることが意味するものを学びそして生きることを楽しみにしている、と語りました。



José Luisは54才です、彼はメキシコ、チアパスのトゥストラで生まれました。彼は行政技術の資格を得て、人材開発、公共事業、そして家族の発展に関する政府機関のために仕事をしました。

2008年8月、ケレタロにて彼はマリア会員と一緒に予備修練期間を始め、2010年にサンチャゴの修練院に入りました。2012年、彼は初誓願を宣立し、そして2015年までメキシコ、プエブラのマリアニスと共同体で生活しました。この間、彼は哲学修士号を得て、メキシコの信徒マリアニスト共同体の霊的指導者として活動しました。

2016年彼はペルー、リマのマリアニスト学校で9か月間過ごし、マリアニスト学校がどのように運営されているか学び、そして理解しました。

2018年、彼は2020年までヌエストラ・セニョーラ・デル・ピラールの共同体で奉仕したケレタロで終生誓願を宣立しました。それから彼はシャミナード国際神学校に入り、2020年8月から2023年6月までローマのグレゴリアン大学で勉強をしました。

マリアニスト司祭としての最初の年に、José Luis神父はマリア会司祭としてどのようにあるべきかを学ぶ上で助けとなるいくつかの役務体験に参加することになります。

---

## 2024年5月、インド地区が創設されます

インド従属地区長評議員会は、従属地区会議とUSA管区長評議員会の支援を得て、総長と総長評議員会に1つの地区となる要望書を提出しました。

11月9日の会議において、総長評議員会はこの要請とその動機、そして同時に行政単位の現在の状況を、時間を掛けて審査しました。注意深く検討した結果、総長と総長評議員会は2024年5月にインド地区を創設することを満場一致で決定しました。発令は、この移行が効率よく出来るタイミングで

公布されます。

この創設はインド従属地区にとって重要な時機であり、この地区はマリア会におけるその成長の軌跡においてこのように元気づけられています。この創設はまたUSA管区にとって画期的な段階でもあり、自らが40年以上も前に設立し、この日まで支援し続けているこの行政単位を大海に押しだしているのです。

地区は十全に構成された行政単位のあらゆる権限を有しています。この権限に伴う義務に加えて、全マリア会の中で更なる責任も受け取ります。それはマリア会のもつ世界的規模への出発です。

私たちは、従属地区の兄弟たちと一緒に活動するのを楽しみにしており、この移行への準備の成功を願っています。インド従属地区の皆さんのために祈り続けましょう！

---

## Via Latina 22 でのマリアニスト家族世界評議会の会議



マリアニスト家族世界評議会  
シャミナードルームにて

マリアニスト家族世界評議員会（WCMF）は年次総会のため、2023年11月3日～5日にローマのマリア会総本部に集まりました。男女マリアニスト総長評議員会とマリアニスト家族の4つの枝の国際責任者の全てのメンバーが出席し、1人の責任者はズームで繋がりました。この会議は各枝からの情報を評議員会の間で分かち合う重要な機会であるだけでなく、私たち家族のカリスマを分かち合うことで、今日、聖霊の呼びかけに対して識別する好機でもあります。各枝は独自に機能するとはいえ、この評議会において表明された一致は、ローカルレベルでの協力や共同の新規構想を活気づけるのを助け、そこでは、国や地方の家族評議会が具体的な計画を実現させることが可能となります。

加えて、WCMFはまた、(10月と3月)の、一年に二回の祈りの日、「マリアニスト・マニフィカト」やクリスマス挨拶など、年間計画を準備します。WCMFはまた、参加者間の非公式の分かち合いと絆を強める好機でもあります。更なる詳しい要約は、世界評議会の事務局から近いうちに発送されます。

---

## 総会に向けての準備の継続



XXXVI  
GENERAL CHAPTER  
SOCIETY OF MARY

計画通り、私たちは今、総会準備の第2段階に入りました。この第2段階では、作業は何よりも最初の「討議要綱 (*Instrumentum laboris*) IL」について計画されています。VL 22の前号ですでに報告されているように、11月中に再編集委員会はこの草案を準備してきており、それは今翻訳中であり、代議員と行政単位評議員会に送付されます。

それで、今後数か月間、私たちは提案されたものを補完し、改善し、そして質の向上に努めます、こうして私たちはマリア会とマリアニスト家族の様々な共同体と事業体の考察を収集することができます。

討議要綱に出てくる提案についての若者たちの意見を知るために、私たちの共同体と事業体に近い若者たちの意見聴取がやはり重要となります。

この第2段階は2月末まで続きます。受け取った全ての提案をもって、再編集委員会は討議要綱を見直し、総会の最終草案を準備することになります。

このプロセスの目標は、基本的に、様々なレベルに関して考察のプロセスを実行することであり、これが私たちの宣教活動のこの重要な面に私たちが関心を持つようになり、またそれに向けて準備するのを助けてくれるようになります。

プロセスのために祈りの重要性を忘れないよう皆さん全員をお願いします。総会への準備の祈りは、近いうちにコピー版で私たちのWebsiteで入手出来ます。この件に関する情報は行政単位の責任者に送付されます。

---

## スイス、フリブールのヨーロッパマリア会員の会議

先の10月27日から29日にかけて80名のヨーロッパのマリア会員がスイス、フリブールに集まりました。この都市はマリアニストの歴史上重要な場所です。実際、そこには、マリアニスト教育学の象徴的な教育事業であるVilla St. Jean、また、多くの世代のマリアニスト司祭が養成されたRegina Mundi神学校が在りました。マリアニスト修道生活はスイスとトーゴの兄弟たちの共同体を通してフリブールで継続されています。

この歴史を考慮して、ヨーロッパ・マリアニスト会議 (CEF) はフリブールでの開催を望みました。通常、CEMは3年毎に開催されます。しかしながらCovid感染症でこのサイクルが中断されていました。今年の会議はこのグループの第3回目の会議でした。準備委員会の入念な企画とスイスの兄弟たちの素敵な歓迎で、全出席者がこの3日間を一緒に喜び、分ち合う機会を得ることが出来ました。殆

どの食事とともに、共通の行事は、旧神学校Regina Mundiの建屋の中で行われました。この建物は何年も前にマリア会からフリブール大学に売却されました。



参加者 グランジュヌーヴの農業研修学校の入り口の前

27日、金曜日午後に歓迎の言葉と、Leo Muller師によるスイスでのマリアニストの歴史の紹介で会議が始まりました。土曜日は考察と意見交換の一日でした。午前中、Johan Roten師、André Fétis師、そしてMaximin Magnan士が次の3つの関係テーマについて大変興味深い3つの考察を紹介しました：共に歩む教会の提唱者としてのマリア、次の総会に向けて共に行う準備の体験、そして今日の若者たちとマリアニスト教育。午後は参加者が午前中に聞いたことについて発表者との対話を始める機会がありました。マリア会の歴史家、Antonio Gascón師と、スイスの信徒マリアニスト共同体の責任者、Rolan Carrupt氏がこの円卓会議に合流しました。日曜日は小旅行と興味ある訪問見物の一日でした。最初に彼らはNicolas Schelker士が詳細に説明したように、マリアニストがその歴史において重要な役割を果たしたグランジュヌーヴ農業学校を訪問しました。それから彼らはグリュイエールの村に行きました。この会議についての最終評価で、参加者は彼らが体験したことに満足と感謝を表明しました。教会の祈りと、異なる場所で捧げられた毎日のミサ聖祭は、真にヨーロッパ的な多様な言語共同体の雰囲気を作り出していました。

---

## マリアニスト家族のため朝の養成プログラム

### — コートジボアール、アビジャン —

マリアニスト家族世界評議員会（WCMF）の会議において1つの共通で、繰り返し起ってくるテーマは、地域のマリアニスト家族評議員会の重要性、および、私たちのカリスマを分かち合う全ての人々の間で家族として分かち合い、一致を作りあげるために、それぞれの地域の枝間で共同活動をスタートさせようとする家族評議員会のイニシアティブです。コートジボアールでの最近のイニシアティブは、正にこれでした。2023年11月19日、日曜日、約130名の人々がアビジャンのトレイクヴィルのSaint Jean Bosco中学校で行われたマリアニスト家族のための朝の養成プログラムに参加しました。



家族としての養成：Elie Oka師が130名のマリアニスト家族メンバーを前にして話をする  
アビジャンにて

この行事はロザリオの祈りで始まり、日曜日ミサを祝うことで終わりました。この間に、そのグループは教皇フランシスのシノドス後の使徒的勧告『キリストは生きている』（*Christus Vivit*）をテーマに取り上げ、マリアニスト家族の中で私たちはどのようにして若者たちの信仰生活と、召命の識別で彼らに同伴することが出来るだろうかと問いかけました。Elie Oka師は、『キリストは生きている』（*Christus Vivit*）への“マリアニストの応答”を提唱し、この文書の重要ポイントを強調し、また世界教育協定とそれに対する教会の応答とも結びつけながら、一つの指針を提供しました。終りに彼は、どの様にこれがマリアニスト家族と私たちの宣教活動にあてはめられるか説明しました。この発表に続いて、ミサの前に、グループは話し合いに入り、自分たちのそれぞれの考えを分かち合いました。

私たちはこの行事を企画し、これに参加した全ての人たちに感謝します。

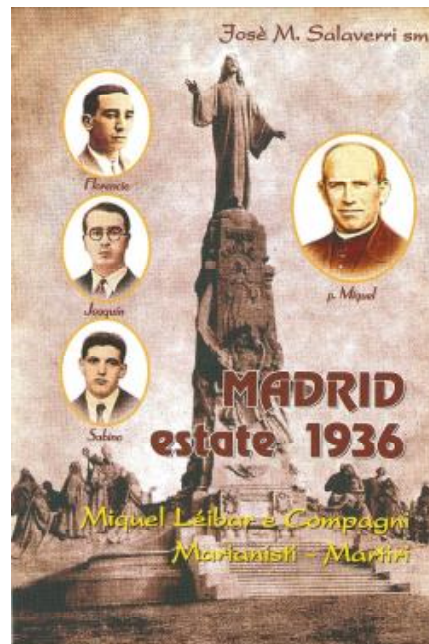
---

## 殉教者と迫害を受けた人たち

キリスト教2000年の間に、7000万人のキリスト教徒が信仰のために殺害されたと推定され、そのうち4550万人（65%）が20世紀に殺害されました。この殺害は、2億人以上の人たちが2回の残虐な世界戦争と、イデオロギーと政治的理由によって引き起こされた収容所の暴力の犠牲となった、いわゆる“短い世紀”（1914–1989）と呼ばれる期間でのショッキングな姿です。前世紀でのキリスト教徒の殉教の主な理由は、憎しみの思想であり、暴力的無神論の制度であり、そして全体主義政治体制でした：例えば、自由国粹主義者、共産主義者、そしてナチーファシストなどです。20世紀の教会は、ローマ帝国時代に処刑された殉教者の数（約15万人）を上回る、殉教者の教会となりました。20世紀に起きたほど多くのキリスト教徒がキリストへの信仰ゆえに自分たちの生命を捧げねばならなかったことは、かつてなかったのです。

スペイン第二共和制（1931-1939）の間に、宗教迫害は7000名以上の聖職者の殺害（4万人中の17.5%）につながったと、Vicente Cárcel Ortí司教は推定しています。マドリードでは、アナキスト労働運動、共産主義者、社会主義民兵が426名の司祭と神学生、661名の修道者と修道女を殺害しました（一般信徒は数に入れず、その中の104名の殉教調査が始められています）。これらの数字は、ソ連邦から来るスローガンに従ってスペイン教会をせん滅しようとしたあの宗教迫害の犠牲者について深い洞察を与えます。

既に列福されているスペイン人殉教者の中には、シウダー・レアルの3名のマリアニスト：Carlos Eraña、Fidel Fuidio、Jesús Hita; そしてマドリッドの4名：Miguel Léibar師、Joaquín Ochoa、Sabino Ayastuy、Florencio Arnaizがいます：更に他8名の修道者がいて彼らの列福調査は今の時点で開始されていません。今日、マリアニストDon Juan Vergarecheの列福調査が行われています。



1936年7月17日、共和制に対して軍の一部がクーデターを布告したとき、支配者たちは全軍隊と警備隊はクーデター的首謀者と強く繋がっていると思っていました。そこで彼らは労働組合のグループと極左の政党（アナキストと共産主義者）、そして左翼（社会主義者と共和黨員）の民兵を武装させることを決めました。彼らは市街地と支配力を失った政府をコントロール下におきました。武装した民兵は自分たちが“ファシスト”或いは“反革命者”と見なす全ての者（判事、弁護士、大学教師、裕福な土地所有者、不動産所有者、）に恐怖を植え付け、彼らのせん滅を実行しました：この人々の中に、全ての聖職者（司教、司祭と修道者）そしてカトリックの重要なグループ（カトリック・アクションと他のキリスト者の運動）などが含まれます。共和制の地域では、全住民は恐怖体制の下、軍事クーデター首謀者への恭順が疑われて射殺されるとの脅迫を感じながら生きていました。

1936年7月24日、マドリッドのPilar中学校が共和制左翼メンバーによって押収され、そして共同体にまだ残っていたマリアニスト18名は卒業生、友人そして親類の家へ避難せざるを得ませんでした。Miguel Léibar神父（51才）はベラスケス通り21の家屋、管区本部の部屋にとどまっていた。そ

ここで彼は個人の礼拝場所を作り、近所の信者に奉仕していました。これは7月28日、アナキスト民兵がこの部屋を襲うまで続けられていました、そして民兵たちはLéibarとそこで働いていた2名を捕まえ、マドリードから7キロ離れたバレンシア通りで彼らを射殺しました。

同じくマドリードでは、若いマリア会員、Sabino Ayastuy (24才)、Joaquín Ochoa (26才)、そしてFlorencio Arnaiz (27才)がカステリョ通り40のBazanシスターたちの家屋に避難しました。数週間後、2名のドミニコ会員が彼らに合流しました。しかし、9月13日、共産主義民兵がこの家屋に乱入し、彼らをサン・ベルナルド通り72にある共産党の収容所に連行しました。拘留された人たちは反革命活動を自白させるための拷問で尋問され、その後革命裁判所で辱めを受け、彼らは死刑の判決で早朝に連れ出され、マドリードの北のエルパルド道路にて射殺されました。

Léibar神父と3名の若きマリアニストは彼らの住む家屋の門番によって密告されました。この門番が自分たちを密告したことを知りながら、彼へのSabino Ayastuyの愛情ある別れのしぐさは、典型的なキリスト教的殉教の特徴である、Sabino Ayastuyの強い赦しの望み表しています。

第二バチカン公会議の《教会憲章》は第42章で、殉教者は、私たちのためにご自分の命を捧げることによってその愛をお示しになった神の御子イエスを模倣する者である、と教えています。ある一部のキリスト者たちは、愛のこの崇高な証を、特に自分たちを迫害する者に対して、与えるよう呼びかけられています。殉教者は人々を救うために死を自ら受け入れた主キリストに似た弟子であり、彼らは血を流すことで自分を主と一致させるのです。これは少数の人に与えられる尊い賜物ですが、それでも、私たちは皆、人々の前でキリストへの信仰を公言し、十字架の道でキリストに従う準備をしておかねばなりません。

## 参考文献

José María Salaverri、記述、『1936年夏、キリストのためマドリードで死去したMiguel Léibarと彼のマリアニスト同僚殉教者』、マドリード、ed. DFR, 2007年（イタリア語とフランス語で翻訳）。

Robert D. Wood、記述、『4名のマリアニスト殉教者』、1936年マドリード、サンアントニオ-テキサス、Pecan Grove Press、2007。

Vicente Cárcel Ortí、記述、『第2共和制（1931-1939）の間のスペインでの宗教迫害』、マドリード、ed. Rialp、1990。

---

## Pironio枢機卿の列福を公布

11月8日、水曜日、教皇フランシスは、法王庁列聖省長官、Marcello Semeraro枢機卿に、科学的な説明が出来ないJuan Manuel Francoの病気治癒に尊者Eduardo Pironio枢機卿の執り成しを認める発令の許可を与えました。Juanは2006年、彼の両親が将来の福者に自分たちの子供のために執り成しを祈っていた後、深い昏睡から目覚めましたが、その時彼は生まれて15か月の幼い男子でした。2022年2月に教皇が神の僕であるEduardo Pironioの英雄的美徳の称号公布を許可してから漸く1年が経つ



たところでした。司教としても枢機卿としてもPironioはマリアニストから良く知られ愛されていました、なぜなら、奉献生活会省の長官として聖ヨハネ・パウロ2世にマリア会の混合構成を説明したのは彼だったからです。それが基で、教皇が1983年の私たちの新たな“生活の規則”を承認されたのです。



**1983年3月4日 「生活の規則」の最終版提出後  
総本部内の小聖堂でのごミサ  
主司式者はEduardo Pironio枢機卿  
共同式司祭：(左より)  
列聖請願総代理、Enrique Torres師、  
総長、José Maria Salaverri師、  
枢機卿の秘書、Fernando Vérguez師**

Eduardo Francisco Pironioは1920年12月3日、ブエノスアイレスの地方、Nueve de Julioで生まれ、そして1998年2月5日、ローマで逝去しました。彼は神学の勉強を終えて、1943年12月5日司祭に叙階され、それからラ・プラタの補佐司教（1964—1972）、そしてマル・デル・プラタの司教（1972—1975）に任命されました。彼はラテンアメリカ司教協議会（CELAM）の事務長であり議長でした。彼がこれらの地位に在ったとき、彼はマリアニストと出会い、彼らの幾名かと深い友情を保っていました。1975年、教皇パウロ6世は彼を奉献・使徒的会省の長官に任命しました。1976年5月24日、枢機卿総会議で彼は枢機卿に任じられ、その後1986年、聖ヨハネ・パウロ2世は彼を信徒のための教皇庁評議会の議長に任命しました。これは1996年まで続きました。この肩書でPironioはワールド・ユース・デーの創設者になりました。

彼は1998年2月5日死去し、そしてアルゼンチン、ルハンの国立マリア聖地に埋葬されました。2006年6月、ローマ列福列聖の教区段階の調査が、主提案者としてのアルゼンチン司教協議会と共に開始されました。列福式は12月1日、ルハンの聖地で行われます。スペイン人Fernando Vérguez枢機卿が教皇庁の代理をします。彼は23年間、Pironio枢機卿の個人秘書を務めて、今はバチカン市の統治長官の役に在ります。

## 待降節のための祈り



彼の静かな足音を聞いたことはありませんか？

彼は来ます、来ます、いつも来ます。

すべての瞬間、すべての時代、すべての日、すべての夜に、

彼は来ます、来ます、いつも来ます。

さまざまな気分で、さまざまな歌を私は歌ってきましたが、

そのすべての音はいつも、“彼は来ます、来きます、いつも来ます”と宣言していました。

晴れた4月の香り高い日に、森の小道を通り抜けて、

彼はやって来ます、やって来ます、いつもやって来ます。

雨の降る7月の鬱陶しい夜、雷鳴がとどろく雲の戦車に乗って、

彼はやって来ます、やって来ます、いつもやって来ます。

悲しみに次ぐ悲しみの中で、私の心を押し上げるのは彼の足取りであり、

私の喜びを輝かせるのは彼の足の素晴らしい感触です。

(ラビンドラナート・タゴール)



総本部共同体とシャミナード国際神学校共同体は全ての兄弟姉妹たち、彼らの協力者たち  
そして彼らの家族に対してご生誕の喜びと幸多い新年のご挨拶を申し上げます！

## 最近の総本部通信

- 計報：20号
- 11月17日：総会連絡#2 準備委員会からで第36回総会の代議員に送付

## 総本部日程

- 12月2日－19日：霊生局長、Pablo Rambaud師がコロンビア・エクアドール特別地区を訪問
- 12月12日－15日：総長、André-Joseph Fétis師、財務局長、Michael McAward士がフランス、ボルドー La Madeleine訪問